

精神分析史の可能性

——「見えないもの」が蒸発する時代に⁽¹⁾

西 見奈子・松本卓也

西——今日はお忙しい中、有難うございます。まずはじめに精神分析史を知ることの意義というところから考えてみたいと思っています。IPA(International Psychoanalytical Association：国際精神分析学会)の雑誌、*International Journal of Psychoanalysis* は年に六回の発行ですが、そこに毎号ではないのですが、年に三、四本は継続して精神分析史に関連する論文が掲載されています。

あとは、精神分析史の専門雑誌である *Psychoanalysis and History* です⁽²⁾。こちらは一九九九年に創刊されて、最初の編集長は *British Society* に所属する精神分析家のアンドレア・サッバディーニでしたが、創刊号にはクライン派の著名な分析家であるロバート・D・ヒンシェルウッドや『フロイトの書き方』⁽³⁾ で知られるカナダの分析家で、歴史家でもあるパトリック・マホーニー、他にもフロイト・アーカイヴのエグゼクティブ・ディレクターやフロイトの改訂版スタンダードエディションの編集者など、豪華なメンバーが原稿を寄せています。

Psychoanalysis and History は元々は年二号の発行でしたが、二〇一七年からは年三号の発行になっています。その時の編集記には「収まりきらなくなった」と書いているので、そうしたこと

からも精神分析史という研究分野の発展が見えてきます。

このように積み重ねられてきた精神分析史研究を精神分析を実践している臨床家が読む利点としては、まず自分たちが臨床でおこなっていることを相対化できるという点が挙げられるかと思えます。またそれに加えて、そうした論文で取り上げられるトピックや分析家というのが、臨床の中のトレンドとは異なるので、単純に多くの発見がある。それだけでも十分に楽しい。それでこうした精神分析史の研究は分析家だけがやっているかというところ、決してそうではなくて、様々な分野の研究者たちが精神分析史に取り組んでいて、読者層も幅広いんですね。

じゃあ、彼らにとっての意義や魅力はどこにあるのだろうかと思うのですが、そうした辺り何かお考えがありますでしょうか。

松本——精神分析史を研究している人には、臨床家もいますが、歴史家も多いですね。精神分析史の草分け的な存在であり、早い時期にジャック・ラカンの英訳にも取り組んだジョン・フォレスターは、ミシェル・フーコーの影響を受けた歴史家でした。⁽⁴⁾

フーコーといえば、彼は一九六三年の『臨床医学の誕生』⁽⁵⁾で、表面にある「見えるもの」を扱っていたかつての医学が、近代医学となる際に、表面にある「見えるもの」と深層にある「見えないもの」との関係を認識するようになったと論じています。つまり、かつての医学は身体の表面に観察できる症状を扱っていたのに対して、近代医学は病理解剖という特殊な操作によって、より深層にあるものへと向かっていったのです。

フーコーの代表作である一九六六年の『言葉と物』⁽⁶⁾は、その図式をより一般化し、近代以降の

「人間」は、深層にある「思考されざるもの」と表面との関係を扱うようになったと言っており、そのような認識のあり方のひとつの範例として精神分析を捉えていました。実際、精神分析では「無意識」という「目に見えないもの」が想定され、その「無意識」によって症状や失錯行為のような「見えるもの」が決定されていると考える。心理検査でも、たとえばロールシャッハ・テストのような「投影法」はすべてそのような想定にもとづいて組み立てられています。

ところが、現代の状況を見てみると、そのような意味での「見えないもの」が蒸発している。実際、かつての「見える」特徴をもちいて事物を分類していた博物学と違って、近代以降の生物学は、器官という「見えないもの」を認識していましたが、現代の生物学では、分子生物学やゲノム解析をみればわかるように、「見えないもの」が「見えすぎる」ほどにまで超—可視化なし過視化されているわけです。それと同じことが、人間の心を扱う科学においても起こったように思えます。特に、精神分析に対する批判のほとんどは、精神分析が「見えないもの」を扱っていた点をつくものです。

西——それは、精神分析史を知ること、近代性について捉え直すことができるということでしょうか。そのあたり個人的にとっても関心があって面白く思います。と言いますのも、日本の精神分析史を考えた時に、日本の近代化と精神分析の輸入、これは明治の終わりから少しずつ始まっているのですが、それはやはり切り離せない問題で、日本がヨーロッパをモデルに近代化しようと追いついた理想とか、日本を近代化しようとする必死の努力とか、そういうものの中に精神分析の痕跡を認められるところがあります。

おっしゃっていただいたことは、つまり近代では「見えないもの」から「見えるもの」を考えようとしていた、でも現代では「見えないもの」が蒸発して、この蒸発というのはとても良い表現だと思いますが、その関係性が変化している、そうしたことが精神分析史からも見えてくるかもしれないということです。

松本——はい、その意味では、精神分析に起こっていることは、他の人文科学にも同じように起こっているのかもしれない。精神分析のなかでも、「見えないもの」が蒸発している時代への応答がいくつかありますが、私には、その応答は二極化しているのではないかと思えます。一方には、神経症水準——境界水準——精神病水準というこれまでの病態水準の層構造に対して、「自閉症水準」のようなより深く、より「見えないもの」でありうる事柄を思考するタイプの応答です。他方には、よりプラグマティックな見地から、より浅い、というよりはむしろ「見えるもの」としての対人関係を調整したり、別の仕方で見えることを可能にするようなタイプの応答です。

西——面白いですね。「見えないもの」を軸に考えると、今の精神分析で起きていることについて、別の分類も可能かもしれないと思いました。例えば、「見えないもの」を見えるようにする、これはもうフロイト以来の精神分析の命題ですが、むしろそうした「見えないもの」にさらに突き進んでいく方向と、「見えているもの」に焦点化して考えようとするという方向の二極化です。

前者には、やはりビオンがいて、特にいわゆるビオンの包容理論ですよね。これは、簡単に言う、患者が感じることもできないし、意識することもできない感覚や知覚、心的な状態、そう

したものを投影同一化によるコミュニケーションを通して、治療者が言葉にしていくというものです。こうした理論をベースに、患者もまだ言葉にできていない体験、あるいは言語が獲得される以前に体験したもの、そうしたものを精神分析の中で体験し、見えるようにしていくというのが、ひとつの大きな流れとしてあるかと思っています。この流れの中には、最近、日本でもついに翻訳書が出たアンドレ・グリーン⁷⁾を筆頭としたフランスの精神分析の発展も加わるものだと思います。

その一方で、後者に相当するのが、見えているものに焦点を当てるアプローチです。こちらはアメリカの精神分析の独自の発展として考えても良いと思いますが、関係論の流れがあります。あとはこの流れに位置付けられるのは、メンタライゼーションでしょうか。こちらもつい先日、良い本が出ましたが、⁸⁾どちらも、今、とても注目を集めていると思います。これらに共通するのは、無意識ではなく、意識や意識に近いものを扱うアプローチで、「見えるもの」により焦点づけた流れとして、ある意味では現代の、「見えないもの」が蒸発している時代への応答として考えられるものなのかもしれませんね。

松本——フーコーは、「見えないもの」と「見えるもの」の関係が問われる「人間」の時代はやがて過ぎ去り、「人間」の終焉⁹⁾がやってくるのだと予言しましたが、現代の精神分析はまさに「見えないもの」の終焉によって危機に立たされているのかもしれない。だとすれば、同様の危機は他の人文科学にもみられるかもしれません。私たちが立ち上げたこのプロジェクトは「精神分析史と人文科学」と銘打っていますが、精神分析はドイツ文学、フランス文学とも深い関係にあ

ります。今回のシンポジウムではシュルレアリスムの研究をされている中田健太郎先生をお呼びしています。たとえば文学研究のなかには、最近では認知科学の用語を利用して作品の読解を行うものがあります。「精神分析と文学」というテーマや「精神分析的批評」を少し齧った者としては、驚くべきことですね。ひょっとすると、分断のようなことも生じているのかもしれない。

西——確かに分断はあるかもしれませんがね

松本——他方で、精神分析の側も確実に変化しており、時代に応答しているのだとも言えます。もはや精神分析の理論史の古典と言ってもよい、ジェイ・R・グリーンバーグとステイヴン・A・ミッチェルの『精神分析理論の展開』⁽¹⁰⁾の副題が示すとおり、精神分析は「欲動から関係へ」と進んでいったわけです。つまり、フロイトの欲動論から、カール・アブラハムを経て、メラニー・クラインの対象関係論へ、というわけです。京大人環の出身者である藤井あゆみさんは『メラニー・コリーのゆくえ——フロイトの欲動論からクラインの対象関係論へ』⁽¹¹⁾でその流れを綿密に追っています。さらにミッチェルは、さらに進んで関係精神分析と呼ばれる治療の始祖にもなるわけですよ。

ラカンは、言語に注目した分析家だと言われており、それは間違いではないのですが、初期から晩年に至るまでのラカンの全体像を見た場合、彼はむしろ身体に注目した分析家だったと言ったほうがいいかもしれません。たとえば、彼の「ラング」という言葉は、子どもがはじめて言

語と出会ったときに身体にトラウマのような仕方で刻み込まれる言語のことです。フェアバーンの言い方にならって、フロイトは *pleasure-seeking* を問題とし、フェアバーン以後の分析家は *object-seeking* を問題とした、と整理されることがありますが、その意味では、ラカンは欲動論つまり *pleasure-seeking* の側に立ち続けた稀有な分析家であったと言えるかもしれません。⁽¹²⁾ ラカンの対象関係論批判や、晩年の「症状のなかで人は享楽している」という考えは、彼が *pleasure-seeking* のことを考え続けた証なのかもしれないのです。

西——先ほど挙げたアンドレ・グリーンですが、彼はウィニコットやビオンを多く援用するので対象関係論の流れとしても捉えることができる人だと思うのですが、彼の考えのベースはフロイトの欲動論にあります。特に私のようなイギリスの精神分析を中心に学んできて、フランスの精神分析に疎い人間にとっては、欲動論を基礎にものを考えている人だという印象が強くなるのですが、今、お話を伺っていて、ああ、そうかと、彼は分析家になる前にラカンと出会って、学んでいた人なので、その影響が彼の欲動論をベースとした考え方に反映されているのかもしれないと思いました。

その点から言えは、確かにフェアバーン以降、対象関係論がひとつの大きな流れとなって、欲動から関係へと視点が移るわけですが、むしろ最近の対象関係論では、そうしたフランスの精神分析の影響もあって、再び欲動に関心が向いているとも言えるのかもしれません。それはあくまでも関係論やメンタライゼーションとの対比としてそう捉えることもできるという意味ではありますが。欲動対関係ということですね。この辺り面白いので、さらにお話をお伺いしたいところ

でもあるのですが、紙面も限られているので、少しシンポジウムの話に戻りたいと思います。

今回、松本先生が提出された発表概要に「精神科医ではないフロイト」と書かれていましたよね。それを見せていただいた時、私、少し驚いたんです。いえ、そう書いていただいて全く構わなくて、私にはその切り口でフロイトを取り上げることとは思いつかない発想だと思って嬉しく拝見したんですけど、日本でのフロイトの紹介では「精神科医」と書かれていることがとても多いんですね。それは日本の精神分析家の多くが精神科医であることも含め、日本では精神分析と精神医学が密接に関係してきたことと無関係ではないだろうと思います。

松本——今ウィキペディアの各国語版を見てみたのですが、ドイツ語・フランス語・英語のいずれでもフロイトは「神経科医」と書かれていますね。「精神科医」と書かれているのは日本語版だけですね。もちろん、当時はその二つは今ほどくっきりと分かれていないのですが、たしかフロイトはいわゆる精神科の病院では研修を三ヶ月しただけだったと思います。もちろん、クレペリンとの対立関係など、同時代の精神医学とフロイトが関係ないわけではありません。あとは、アメリカの力動精神医学もありますね。しかし、フロイト自身への精神医学の影響は、あまり目立ちません。細部にグリーンガーやクラフト＝エビングの影響が見られるくらいではないでしょうか。

西——ええ、そうですね。誰がどのように取り入れ、語ってきたかという問題がそこにはあると思います。

松本——日本の医学や心理臨床のなかにどのようなようにして受容されていたのか、という点も、今後の精神分析史の大きなテーマのひとつでしょうね。

西——ええ、日本という括りだけではなく、精神分析が別の文化や学術領域にどのように波及していったかを検討することは、精神分析史にとって重要なテーマだと思います。今回のシンポジウムでお話いただく予定の下司晶先生は『精神分析の子どもの誕生』——フロイト主義と教育言説⁽¹³⁾で、学校をはじめとする教育のなかでの精神分析の影響について考えておられます。そして、もうひとりのシンポジストの遠藤不比人先生が昨年、ジョージ・マカーリの『心の革命——精神分析の創造』を翻訳出版されています。⁽¹⁴⁾この本の日本での出版は嬉しかった。これまでもフロイトの伝記というものは色々ありましたけど、その時代性から精神分析が立ち上がっていく様子を描いた傑作だと思います。

松本——アンドレアス・マイヤーという精神分析を対象とする科学史家らが、精神分析における歴史記述は、これまで、アーネスト・ジョーンズの『フロイトの生涯』⁽¹⁵⁾に代表される偉人伝か、それともアイゼンクの『精神分析に別れを告げよう』——フロイト帝国の衰退と没落⁽¹⁶⁾のような偶像破壊的なものか、というふうに二極化していた、と指摘しています。⁽¹⁷⁾そして、その二つのあいだには対話もない。マカーリ先生の本は、同時代の科学のネットワークのなかから精神分析が生まれてきたことを浮き彫りにしており、「精神分析史」というディシプリンのあるべき研究方法の一つを日本に教えてくれる重要な本であるように思います。

西——ええ、ぜひそうした研究が日本でもおこなわれるようになることを願っています。今回のシンポジウムを企画した意図はまさにそこにあるのではないでしょうか。

これまで精神分析史の研究発表の場としては、日本精神医学史学会、日本病跡学会などがありましたし、他にも日本精神分析協会や日本精神分析学会などでも部分的に取り上げられてきました。おそらく文学や教育、美学など、それぞれの分野でも、研究がなされ、発表がおこなわれていたかと思います。ただ、精神分析史を中心とした集まりはなかった。

今回、このシンポジウムの名前を考えていたときに、松本先生から「精神分析史と人文科学」というご提案いただいて。実はお聞きした時には、ちょっと長すぎて説明的すぎるかなと思っていたんです。もっと違う名前、例えばブルームズベリー・グループとかイマーゴみたいな(笑)、そういう名前が良いなと思っていたんですけど、でもしばらく時間を置いて眺めているうちに良い名称だと思うようになって。この名前の通り、精神分析史を中心に据えて、人文科学の人たちが一同に集まると、これまでこぼれ落ちていたものが拾えるんじゃないか、見えていなかったものに光を当てることになるんじゃないか、そう思っています。多くの方が精神分析史に触れてくださることを何より期待しています。

(京都大学大学院教育研究科)

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

- (1) 本対談は「精神分析史と人文科学」シンポジウムの創設に向けて、二〇二一年六月三日に収録したものである(初出:「精神分析史と人文科学」シンポジウムWebサイト)。
- (2) その他、一九八八年に創刊された精神分析史に特化したドイツ語専門誌『Luzifer-Amor』がある。
- (3) パトリック・マホーニー(北山修訳)『フロイトの書き方』、誠信書房、一九九六年。
- (4) 井上卓也「ジョン・フォレストと精神分析」『哲学の探究』第四七号、七九—一〇〇頁、二〇二〇年。
- (5) ミシェル・フーコー(神谷美恵子訳)『臨床医学の誕生』、みすず書房、一九六九年。
- (6) ミシェル・フーコー(渡辺一民・佐々木明共訳)『言葉と物——人文科学の考古学』、新潮社、一九七四年。
- (7) アンドレ・グリーン(ジャン・アブラム編、鈴木智美・石橋大樹訳)『アンドレ・グリーン・レクチャー——ウィニコットと遊ぶ』、金剛出版、二〇二一年。
- (8) 池田暁史『メンタライゼーションを学ぶ』、日本評論社、二〇二一年。
- (9) 第一回「精神分析史と人文科学」シンポジウムのことである。二〇二一年九月七日に開催された。
- (10) ジェイ・R・グリーンバーク、ステイヴン・A・ミッチェル(横井公一監訳)『精神分析理論の展開——欲動から関係へ』、ミネルヴァ書房、二〇〇一年。
- (11) 藤井あゆみ『メランコリーのゆくえ——フロイトの欲動論からクラインの対象関係論へ』、水声社、二〇一九年。
- (12) Lacan J., *Le Séminaire, livre VI, Le désir et son interprétation, texte établi par J.-A. Miller*, Paris, La Martinière, 2013.
- (13) 下司晶『「精神分析の子」の誕生——フロイト主義と教育言説』、東京大学出版会、二〇〇六年。
- (14) ジョージ・マカリー(遠藤不比人訳)『心の革命——精神分析の創造』、みすず書房、二〇二〇年。
- (15) アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』、竹友安彦・藤井治彦共訳、紀伊國屋書店、一九六九年。
- (16) H・J・アイゼンク(宮内勝ほか訳)『精神分析に別れを告げよう——フロイト帝国の衰退と没落』、批評社、一九九八年。
- (17) Marinelli L., Mayer, A., Editors' Introduction: Forgetting Freud? For a New Historiography of Psychoanalysis. *Science in Context*, 19(1): 1-13, 2006.